

氏名 安 田 英 己

学 位 の 種 類 医 学 博 士

学 位 授 与 番 号 甲 第 468 号

学 位 授 与 の 日 付 昭和54年 3 月31日

学 位 授 与 の 要 件 医学研究科病理系病理学専攻  
(学位規則第5条第1項該当)

学 位 論 文 題 目 髓芽腫の超微形態 — 特に組織像との関連について —

論 文 審 査 委 員 教授 妹尾左知丸 教授 大塚 長康 教授 佐藤 二郎

### 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

小脳髓芽腫を超微形態の面から検索し、細胞の分化と組織構築から病理発生を明らかにしようとする試みは今日まで多数行なわれているがいまだ諸家の一致した見解は得られていない。その主な原因の一つは髓芽腫の組織像の多様性にあり種々の組織形態像を伴う事が多い事と、個々の特徴的光顕像と電顕像の比較検討が充分なされていないことにあって考えられる。そこで人体例10例について髓芽腫を①未分化細胞部分、②ロゼット形成部分、③渦状配列部分、④結合組織増生部分の4種の組織型に分類し個々の症例について電顕的に検索を行なった。その結果、基本的には一連の移行型を示す未分化細胞が主体であったが、ロゼット形成部分では中心に向ってのびた細胞質突起が互にからみ合いその長軸と平行に微細管が多数認められたところから低分化ではあるがneuroblasticな分化を示していると考えられた。又、渦状配列部分のうちPTAH染色で細胞質突起が好染する所謂“spongioblastic differentiation”の部分は電顕的には明瞭な神経膠線維を認めず平行に走る細長な細胞突起の不規則な束状配列が特徴であった。このことは光顕的PTAH陽性所見は必ずしも細胞のglialな分化を反映するものではないと考えられる。又、結合組織増生部分では腫瘍細胞は本質的に未分化細胞部分と同様所見を呈したが孤立線毛形成はこの様な部にのみ特徴であった。以上より、髓芽腫は低分化であるが僅かながらもneuroblasticな分化傾向を示し始めた細胞よりなる腫瘍で未だglialな分化は認められないことが確認された。

### 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は人の小脳髓芽腫10例についてその細胞分化の方向と組織構築を超微形態学的に研究し、多彩な形態を示す本腫瘍の夫々の部分について詳細な検討を遂げ、本腫瘍の病理発生の考察に有用な知見を与えたものであり、価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。